

後期の初めにあって 6年生へ！

もたもたするな！ 素早く処理する工夫と努力をしろ！
授業を細大漏らさず聞き取れ！ 耳したことはメモをしろ。
こうして初めて聞くということができる。
黒板を写すのではなく、耳で聞いてノートをとれ！
集中する、思考するとは、こういう実践をすることだ。

これらのことは、自分で工夫し努力すべきことだ。
自分でこういう工夫と努力をしないで、ただ漫然と塾の授業を受けているという受け身の態度は、煎餅をかじりながら、漫然とテレビを見ているのと変わらない。怠け者の暇つぶしに他ならない。
勉強の内容は、ビーカーAの水をビーカーBに移すように、移転できるものではない。
勉強の内容は、自分で獲得し、自分で努力して身につけるべきものだ。
自分で獲得するために、よく聞く、ノートをとる。身につけるために繰り返す。無意識の技になるまで繰り返す。

これらのことは、ビルの建設でいえば土台の工事にあたる。
土台がしっかりしていないビルは砂上の楼閣にすぎない。
あえなく崩れ去る。受験なら不合格となる。
「基本を大切にせよ」という標語が大切なのではない。
「基本を大切にす」実践のみが意味を持つのだ。

志望校対策ということが言われる。
最も有効な志望校対策は何か？ 実力をつけることだ。
漢字の実力のない者が、漢字テストの対策をすることはどういうことだろうか。対策などいらぬ。漢字を繰り返し練習して、いつでもどこでもどんな漢字でも書けるようにすれば、漢字テストは満点をとれる。実力をつけるということ以外にどんな対策があるというのか？

次のような、志望校の問題に関する情報の提供は志望校対策だろうか？
「A校の国語の問題は、2400字程度の論説文と物語文が出る。論説文は、選択問題が4問で、記述問題が4問出る。物語文は、選択問題が5問で記述問題が3問出る。論説文も物語文も選択問題に1問だけ非常に選びにくい問題が含まれている。論説問題の記述問題は、3問が30字程度で、傍線部の前後に着目すれば答えが書ける。残り1問は100字記述であり、文章中のいくつかのポイントをまとめる必要がある。物語文の記述は、2問が30字程度で気持ちの読み取りの問題である。残り1問が100字程度で主題の読み取りにかかわる難問である。」

しかし、こんなことは過去問を解けばわかることであり、「対策」として取り立てて情報化して言うことに意味はない。
大切なのは、このような形で出題される問題の一つ一つを、新たに出題される文章について、解くことのできる実力をつけることである。
あるいは、これまでと出題形式が変わっても、やはり出題される問題の一つ一つについて正解を出せる実力をつけることである。
これが真の対策であり、これ以外の対策としてどんなものがあるというのか？

このような実力は、過去問を解くだけでつくものではなく、さまざまな論説文・物語文をそれぞれの文章の論理にしたがって精密に読み解き、さらにその分析結果を総合するというトレーニングを重ねることによってつくものである。過去問も、このような観点から勉強することで、初めてそれを解く実力をつけることができるのであり、ただ解けばよいなどと勘違いをしてはならない。過去問という限られた範囲のものを通して、精密分析と総合の練習を繰り返すことは、実力を大きく伸ばすことの大きな一助となる。
しかし、ただ解いたという片付け仕事をするだけでは意味はない。
あくまで実力をつけることが本来の目的であり、過去問を解くことが目的ではない。
この点を勘違いするのを主客転倒という。

一般の大手塾では、通常授業があり、それに付加する形で志望校対策授業がある。しかし、後者をやるなら前者は不必要である。
志望校対策授業を中心に、それに必要なことを自分で復習し補って勉強すれば、入試に必要なことはすべてカバーできるからだ。
余分な宿題などやっているよりも、志望校対策授業の過去問などを中心として、これまでの勉強をもとに、それに必要なことを理解する形で復習をする。そして、算数なら、問題演習を、基礎から応用・発展、さらに、関連問題まで含めて、幾度もやればよい。理社なら、必要なことをノートに書き留めてまとめたり、図や表にまとめてみればよい。こういう研究的な勉強の方が面白いし、自分でやるので自然に身につけてしまう。時間の無駄も省くことができ、体力的にも有利になる。

人と同じことをやっていれば、人と同じでしかない。

受験は競争だ。多くの受験生にとっては、上に追いつき追い越すことが目標のはずだ。

にもかかわらず、人と同じことをやっているのはどういうことだろうか？

それでは、平凡の地平を越えられないはずだ。

ちなみに、「アナがある」とか「アナを埋める」などということが言われるが、それだけを目的とするような視野の狭い勉強は、実力をつけることとは程遠い結果になってしまう。「アナ」などというものにこだわっていると、枝葉末節を暗記しようとするだけの一夜漬けのような勉強になり、高度な思考問題を出してくる学校の問題には対応できないことになる。逆に、上のような勉強をすれば「アナ」など自然に埋まってしまう。

模擬試験問題の活用も重要だ。模擬試験をむやみやたらに受けることが大切だと言っているのではない。模擬試験を自分の力を伸ばすために「活用」することが大切だと言っているのだ。幾度も言っていることだが、模擬試験問題でできなかったところは、確実に自分のものにしなければならない。これをしなければ、模擬試験を受ける意味はない。模擬試験問題は点数の悪いことを嘆くためにあるのではない。本試験の練習をするためだけでなく、自分の弱点を見つけ補うためにあるのだ。これでいくつかのアナは埋まるはずだ。にもかかわらず、「アナ埋め、アナ埋め」と言いながら、少しもアナを埋めないのはなぜだろう。模試を受けたら、自分ができなかった問題について、何が原因でできなかったのか、どうすればできるようになるのかを考えるべきだ。たとえば、算数問題の意味が取れない、意味はとれるが、考え方がわからない、考え方はわかるが計算のスピードが遅くて時間が足りなくなる、などができない原因だ。その問題が解けない自分にはすぐにわかることだ。問題の意味が取れないのなら、問題文をいくつかの要素に分けて書いて分析してみるのだ。解き方がわからないのなら、塾の先生に聞くことも大切だが、自分で何もしないで聞くのは間違っている。参考書テキストなどを参考に自分で理解する努力を真剣にすることが前提となる。計算のスピードが遅いのなら、それは計算練習も含めて無数回のトレーニングをするしかない。1回や2回解いたくらいで、もうやめてしまうのなら、受験をやめた方がよい。ちなみに、これらの弱点は相互に関連しており、どれかが弱いというのではなく、どれも弱いというのが普通だ。そういう人間は、問題を、一日一回というように繰り返し解いて、問題の文章も解き方の筋道も全部暗記してしまうのがよい。最初は馬鹿の一つ覚えのようであっても、10個、20個・・・100個と続けているうちには、馬鹿ではなくなる。暗記というよりも、体得してしまうことだ。必ず他の問題の解き方の理解につながってくる。アナは自然に埋まる。

四教科のバランスということがよく言われる。四教科それぞれについて可能な限り実力をつけることが大切だけではないのか。どのようなバランスが必要だというのか。算数ができるから、国語はできなくてよいとか、国語ができるから、理科はある程度でよいというのだろうか。もしそうだとするのなら、それは実力をつけようとしないう勉強であり、不合格になるリスクが高まるのではないのか。それに、算数ができるから国語はできなくてよいというのは、バランスではなく、アンバランスだろう。あるいは、算数ができるから今は算数の力を維持する程度の時間をかけ、できない国語の時間を多くするというのだろうか。それは四教科それぞれについて、可能最大限の力をつけるための時間配分の調整にすぎず、四教科のバランスではないだろう。私は、受験勉強の時間配分は、算数5・国語2：理社3でよいと思っている。国語は鈴木国語の授業と過去問指導＋復習で十分である。この基準をもとに、各自が各自の事情に応じて、算数を4、国語を3、理社を3などそれぞれ調整すればよい。さらに、時間配分とは、時計の時間の問題ではなく、密度、能率の問題であるということも忘れてはならない。限られた時間の中で最大の効果を上げるため、重要なものを選ぶ取捨選択と徹底化の問題である。これは自分の人生とどれだけ真剣にひたむきに向き合うことができるかという生き方の問題でもある。

よく人は「平和が大切です」とか「他人を思いやりましょう」という。しかし、そういうことも自分の人生を真剣に生きることがあって初めて可能になることではないのか。自分の人生をかけたがえのない大切なものと思う気持ちが平和であり、他人の人生を自分と同じくらいに大切に思える気持ちが思いやりではないのか。

いずれにせよ、わき目もふらず、ただひたすら、真剣に、反省と工夫をしながら、合理性を追求しつつ、目標に向かって邁進してほしい。つまらぬ心配や余分なことを考えていないで、まず実行しなければならない。そののちに、いろいろなことを考えることができるようになる。つまらぬことに時間を割けば、その分合格からは遠ざかる。

ちなみに、母親の中には、模擬試験問題を悲嘆と絶望の根拠にし、果ては、自分の子どもを奈落の底に引きずり落とそうとする人がいる。しかし、たとえば、スポーツの試合で、あるいは、企業経営で、相手チームや相手企業に大きく負けているとして、その状態で悲嘆し絶望して、試合放棄や経営放棄をすることが許されるだろうか。最後まで死力を尽くして戦わなければならない。そのうち逆転することもよくあることだ。試験を受ける場合だって同じだ。圧倒的優位に立って試験を受けるなどということはまれなことだ。たいていの受験生は多かれ少なかれ、逆転にかけなければならない。この逆転がなかなかできないとじれてヒステリーを起こす人間と、逆境に耐えて力を蓄えようとする人間とでは、大きな違いがある。前者には発展の可能性を自分で捨ててしまっているが、後者は発展の可能性を秘めている。この発展可能性を実現することこそ、単に試験に合格するというだけでなく、その人間をも大きく成長させることになる。「試験」はそういう「試練」という宝でもある。「試練」を嫌い、合格という利益だけを得ようとするのは、自己中の甘えん坊ではないのか。